

がぶくしょー

いま農協改革を求める声が高まっている。さる五月の経済財政諮問会議では、「改革か解体か」と農協に改革を促す発言があった。背景としては、小泉構造改革としての市場原理の徹底等農政転換の動きに対応した変化を農業・農協サイドに迫るねらいがある。

過去、農業・農協批判が高まったときには農産物輸入自由化拡大等農業を取り巻く環境の大きな変化が伴っていた。いまの農協批判をどう受け止め、どう対応するのが農協サイドの当面する大きな課題であるが本書はその一助ともなる。

本書は、長らく農政・経済、農業団体を取材してきたジャーナリストである著者が、その経験を踏まえ、世間（ジャーナリストの目）からみた農協の課題・問題点を指摘し、今後のあり方を訴えるものである。本書の特徴を三点述べる。一つは各種の農協批判の紹介である。第二章「問われる事業活動」では組合員の要望・期待に添えていない農協、農協の各種事業に積極的に参加しようとする組合員、組合員への奉仕の手段であるはずの事業活動が目的と

『JA改革の本流』

農協は日本の食・農を担えるか

荻野孝利著 (日本経済評論社)

なつた経営主義等が批判されている。そしてその原因は、「運動体としての協同組合運動の喪失」にあるとする。しかし、何故「喪失」が起こったのかには触れていない。二点目は、第三章「農協とマスコミ」で住専問題等を題材にマスコミによる農協・農業バッシングを取り上げている点である。これはマスコミ関係者らの農民・農村・農協への偏見と現場を知らないことに起因していること、またスポンサーの意向を踏まえたものであり、「今のマスコミは、強きを助け、弱きを挫く」報道になっている」と

指摘する。しかし、企業の情報・広報重視、マスコミ対応の絶妙さ（具体例の紹介はない）の姿勢に学び、マスコミの影響力の大きさや特質に関心をもつとマスコミを活用すべきという。貴重な助言と受け取るべきである。そして三点目は、第六章「新たなほめ殺し」で新基本法に基づいて打ち出されている多面的機能等諸政策について、地域の住民・農家の視点が大切と主張している点である。即ち、棚田の再評価、デカップリング等中山間地域を再生させる新たな取組みは、地域農家にとっては、今

頃になって……」の思いが強いとして、政策や世論のムードに流されるのではなく、衰退した中山間地域の住民・農家組合員の生活・生産を起点としたものとするのが大切であり、地域住民・組合員農家に新たな負担・犠牲を強いていないか常に検証と反省を怠ってはならないという。重い主張と受け止めたい。

最後に、国民の食に対する意識の変化とともに生命産業としての農業に注目する動きも起こりつつあるとして、このフォロウの風を受けて、「農協自身がそれをどうのうに生かし、協同組合らしさを

発揮し、発展に結びつけることが出来るのか。……自らの存在価値を問い直しながら、自信と誇りをもって邁進すれば、農協は改革可能であり、将来は輝いている。」と結んでいる。

本書は新聞の論説等を多数引用しつつ、歯切れよく論旨が展開されている。ただそれだけにやや深みに欠けるうらみはあるが、食と農を担う農協への暖かいまなざしとともに農業・農協が直面している諸課題が網羅的にコンパクトにまとめられている。農業・農協への理解を深める最新版の入門書としても好適なものである。

(二〇〇二年五月、二五六頁、二、三二〇円)

(鶴澤伸一郎)